

「優しい日本」づくりに

朝日

追う

ミャンマー少数民族 難民不認定

ミャンマー(ビルマ)の軍事政権に迫害されたとして日本で難民申請をし、長崎県の大村入国管理センターで収容されていた少数民族「ロヒンギャ族」の男性らが仮放免を認められ、4人が大阪府茨木市で会見を開いた。男性らは難民と認められない決定を法務省から受けており、「私たちはどこで生きればいいのか」と不安を訴えた。【8月31日付朝刊】

「信じて日本に生まれ、助けてもらえらる」と信じています」
21日、大阪地裁で、弁護士が書面を読み上げた。8月に仮放免されたエナムウラさん(28)ら3人は難民不認定処分を取り消しを求めて提訴し、この日が第一回口頭弁論だった。

大阪地裁で、ハシンさん(30)はロヒンギャ族の他の男性6人と東京地裁に提訴した。

仏教国のミャンマーでイスラム教徒の少数民族ロヒンギャ族は差別され、軍事政権に市民権を認められず、軍による強制労働や略奪などの迫害を受けてきた。

3人は傍聴席の一番前で、日本語を十分に理解できないまま、裁判官をまっすぐ見つめていた。4人は仮放免後、支援者が用意した愛知県一宮市にある2DKのアパートで暮らしている。マトンのカレーなど故郷の料理を自炊して暮らし、週末などは名古屋市内で暮らす日ミャンマー人らと民主化を要求するデモに参加している。3人が

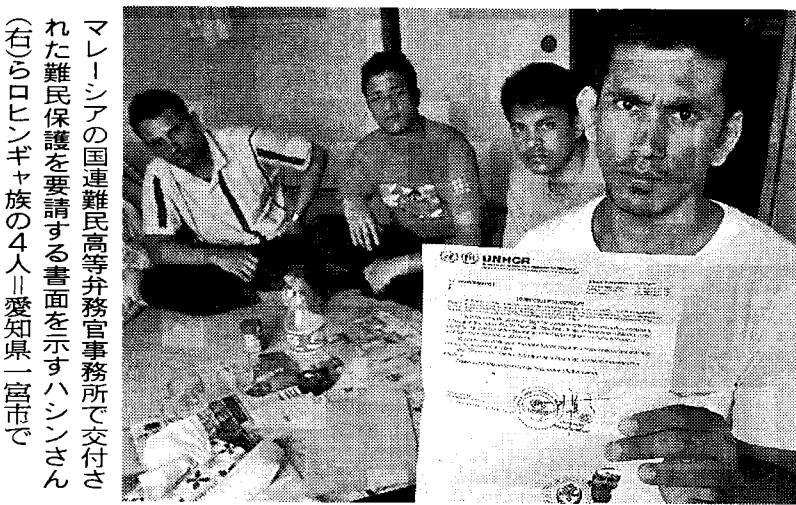
ハシンさんは10代後半のころ、バングラデシュ国境に近い自宅からミャンマー軍兵士に連行され、軍が経営するエビの養殖場で働かされた。暴力や空腹に耐えられず間もなく脱走、自宅へ戻った。「見つかったら殺される」。母親に促され、タイやマレーシアを転々としながら暮らしてきた。

ハシンさんは10代後半のころ、バングラデシュ国境に近い自宅からミャンマー軍兵士に連行され、軍が経営するエビの養殖場で働かされた。暴力や空腹に耐えられず間もなく脱走、自宅へ戻った。「見つかったら殺される」。母親に促され、タイやマレーシアを転々としながら暮らしてきた。

軍政の迫害 ビラで訴え

「子どもの時、いつか日本人を見てみたいと思っていたよ」。太平洋戦争中、ロヒンギャ族は宗主国の英国と戦う日本軍に友好的だった。故郷の老人たちは「日本人は優しいよ」と言っていた。日本行きにためらいはなかった。「ビルマにか

えされることだけが怖かった」。貯金をはたいて、プロカーに8千リオンギ(約25万円)を払って、06年2月に偽造パスポートでインドネシアを出国したが、関西空港で不法入国を疑われ拘束された。すぐに難民認定の申請をしたが、計1年



半、入国管理センターなどに収容された。民主化運動指導者アウン・サン・スー・チー氏が軍政に軟禁された03年以来、日本の難民認定申請者数のトップは常にミャンマーだ。昨年は前年比約3倍の626人が申請した。だが、昨年、難民と認定されたのは、異議申し立てで決定が覆った12人を含めても28人。反政府運動のリーダーらが認定されても、デモに参加した市民や少数民族の多くは不認定となっている。日本はあこがれの国だった。今年、ミャンマーに残る弟が軍に拷問されたと伝え聞いた。「それでもボクは日本に来いと言っちゃれなかつた」と唇をかんだ。21日、法廷から出たエナムウラさんら3人は、ようやく緊張した表情を少し崩した。そして、支援者らに何度も、何度もお辞儀を繰り返した。(浅倉拓也)

マレーシアの国連難民高等弁務官事務所で交付された難民保護を要請する書面を示すハシンさん(右)らロヒンギャ族の4人。愛知県一宮市で